



沖繩を襲った大旱魃かんぱつ

今から約一〇〇年前の一九〇四年（明治三十七）、記録的な大旱魃が沖繩を襲いました。この旱魃は七か月間も続いたことから「ナナチチヒヤーイ（七か月の旱魃）」と呼ばれ、人々の生活を苦しめました。

当時の新聞には、「農作物の被害甚はなはだしき」「旱魃打ち続きし為め折角せつかく植付けし甘藷かんしょも枯死こしせんとする有様ありさま」と、旱魃の被害が切々と伝えられています。西原では、とくに上地区で被害が大きかったといえます。また、人々の主食であった芋も不作に見舞われました。芋を積んだ山原船が与那原港に着く日には、那覇や、遠くは糸満の摩文仁、喜屋武から来る仲買人で殺到したといえます。そのため、作物の値段が騰貴とうきすることが度々ありました。

被害は作物だけに留まらず、首里では飲料水の取り締りが行

われ、風呂屋の廃業が続きました。生活の苦しさから、人々は御嶽に集まり、雨乞いの祈願を行ったといえます。

しかし、そのような旱魃のなかでも清水しみずを絶やさないう井戸がありました。池田のモーシチャ又カーには首里の人々が、森川イッカンの一貫ガーには浦添の西原村の人々が水を汲みに訪れました。とくに一貫ガーの名称は、旱魃の際に浦添・西原村の人々が一貫（二銭）ずつ出し合って井戸の改修を行ったことに由来しているといわれています。近年まで、浦添市西原で行われている綱引きの際には、一貫ガーが拝まれています。

現在の生活では忘れられつつある井戸ですが、ダムや水道が設備されていないころは、人々の命を繋ぐ大切な場所でした。



森川の一貫ガー

【語句説明】

甘藷…サツマイモ

騰貴…物価や相場が上がること